

コードギアス  
CODE GEASS  
Arthur on the Misty Streets  
霧京のアーサー



# コードギアス 霧京のアーサー

Arthur on the Misty Streets

---

あざの耕平

# コードギアス 霧京のアーサー

## 事件1 「殺人鬼の醜聞」 2

ベーカー街222B。

それがコナンの下宿先の住所だ。ウエスト・エンドの中心を南北に延びるベーカー街。その222番地の上階である。

玄関のドアを開け、階段を登る。コナンの寝室があるのは建物の三階部分。リビングやダイニング、それに同居人の居室があるのが、二階。

コナンは二階の廊下から、リビングに入るドアを開けた。

「あ、おかえり」

「……おかえり、じゃない」

リビングの椅子に座っていたのは、サイズの大きいシャツに、サスペンダーで吊したスラックスという姿の少女だった。中央のテーブルにはキャスケット帽が放り出されており、背もたれには脱いだジャケットが掛けられている。まるで男のような出で立ちだが、服装のみならず髪も肩口で切り揃えられていた。

歳は十八。コナンより三つ下だが、もう少し幼く見える。眼鏡を着用しており、そのレンズの奥では、いかにも活発そうな瞳が、コナンに向けられていた。

「いいかね、ミス・ハドソン。いくら大家の孫とはいえ、未婚の女性がそう度々、独身男の部屋に入り込むんじゃない」

「いつも言ってるけど、名前でもいいわよ。マリーで。ミス・ハドソンばかりじゃ、コナン君だって紛らわしいでしょ？」

「……『君』は止せ」

「まだ言ってるの？　なんでそこ、そんなに気にするかな」

「……俺の方が年上だからだ。他に意味などない」



仏頂面で返事をしつつ、コナンはコートを脱ぎ、コート掛けにかけた。

古いが広いリビングは、苦学生の身には過ぎた、立派な部屋だ。中央に敷かれた色褪せたカーペットに、丸いテーブルと椅子が四脚。暖炉——元暖炉の前に、肘掛け椅子が二脚。食器棚と、仮眠が取れるサイズの長椅子。書き物に使うデスクと、作業机。その他、大小様々な書棚や戸棚が、壁の隙間を埋めている。どれも掃除が行き届き、居心地良く整えられていた。コナンの弛まぬ「整頓」の成果だ。

ただ一方で、細部に視線を向ければ、至る所に「渾沌」がこびり付いているのがわかった。

棚からこぼれ落ちそうな書類やファイル。びっしりと並べられた、用途が推測できない歪な金属部品。逆に、用途は明確だが、なぜそこに飾られているのか理解しかねるガラクタたち。

特に酷いのは、オイル染みと焦げ跡が斑模様になった作業机だ。丸まった設計図と、銅線、金属片の他、幾種類ものボルトにナットにネジ。スパナやドライバー、ハンマーといった工具から、定規、コンパス、はたまた薬品入りのガラス瓶などが無造作に置かれている。机の前の壁には書き殴ったメモがナイフで刺し留められていた。

そして、すっかり「改造」された暖炉である。

それはいまも、低い稼働音を響かせていた。周囲を囲むマントルピースには、ぴかぴかに磨かれた計器メーターが並び、コードとパイプが血管のように張り巡らされている。後者は、暖炉のみならずリビング中の壁を這い、部屋にある様々な機械に繋がられている。

彼の同居人が息をするように排出する、「渾沌」の結果だ。

「……で？アーサーは？」

コナンがマリーに尋ねたときだった。

コナンが入って来たのとは別のドア——同居人の居室に続くドアの向こうから、

バチンッ！

と何かが鋭く弾けるような音が響いた。

まるで、壁に向かって拳銃でも発砲したかのようなのだが、幸いな事に何が原因かは見当が付いた。いや、幸いでもなければ、具体的に「何が原因」かは不明なのだが、彼の部屋から騒音が響くのは珍しいことではないのだ。彼が自室に居る証拠である。

「……相変わらずか」

コナンは疲労感を漂わせ、手近な椅子に座り込んだ。やれやれと、手に提げていた新聞をテーブルに放り出す。

すると、新聞を見たマリーが「あっ！」と眼鏡のレンズを光らせた。コナンは自らの失敗に気付いて顔をしかめた。

「その記事！ やっぱりコナン君も気にしてたのね！」

「だから、『君』付けは止めてくれ。それに、俺が気にしてるわけじゃない。大学の同期から渡されただけだ」

「つてことは、少なくともコナン君の——」

「呼び捨てで良いから！」

「——コナンの友達は、気にしてるってことじゃない！ 《ジャック・ザ・ナイトメア》の凶行を！」

マリーはテーブルに両手を突くと、鼻息を荒くして身を乗り出した。

「それもこれも、一向に事件解決に乗り出そうとしないからよ！ 我らが名探偵、アーサー・ホームズが！」

両目を爛々と輝かせるマリーに、コナンは閉口する。大家の孫娘から視線を逸らし、ちらりとテーブルの新聞を眺めた。

巷を騒がす殺人鬼、《ジャック・ザ・ナイトメア》。

被害者は老若男女様々で、互いに接点も持つておらず、殺害された時期もバラバラ。一度の犯行で一人のときもあれば、ひと晩で三人が殺されたこともある。場所も、ロンドンとその近郊という大きな括りがあるだけで、これと言った関連性は見当たらない。そのため、標的に共通点がない、いわゆる無差別殺人と目されていた。

ただ、被害者に共通点がない一方、その犯行には幾つかの共通点があった。

ひとつは犯行のほとんどが夜に行われていること。また、殺害には必ずナイフが使用されていること。

そしてもうひとつが、どの殺害現場にも、「仮面」が残されていることだ。このため、犯人は同一人物、もしくは同一グループと考えられているのである。

誰が呼んだか、いつしか付いた名が《悪夢のジャック(ジャック・ザ・ナイトメア)》。ゴシップ好きのロンドン子たちを恐怖と好奇心で驚ぶかみにしている、猟奇的犯罪者だ。

そしてまた、ロンドンを賑わす新聞の――特に大衆紙の――格好の「ネタ」でもあった。

「実際、《ストランド・ニュース(うち)》にもバンバン投書が寄せられてるんだからね？ おたくの名探偵は一体何をやってるのかって！ 編集長も、アーサー君のコメント取って来いつてうるさいし」

そう、《ストランド・ニュース》の若手記者であるマリー・ハドソンは強く訴えた。ちなみに、同紙の人気コーナーである《名探偵コラム》は、彼女が大家の孫という特権を活かし、下宿人のあることないことを面白おかしく書き立てた産物だったりする。

「あいつのコメントなら、幾つかあつただろ。『興味がない』とか『市警ヤードの仕事だ』とか」

「あんなやる気のないの、使えるわけないじゃない！ 読者が求めているのは、『名探偵ヒーロー』のコメントなんだからっ」

「それは……無い物ねだりというものだろう」

「そこをどうにかするのが、プロの記者つてもものよ！」

「いや、プロのジャーナリストなら、真実を伝えるべきでは？」

コナンの率直な意見を、マリーは眼鏡の位置を直し、ハッ、と鼻で笑う。どうも、青臭い感傷主義センチメンタリズムと見なされたらしい。不本意ではあるが、いちいち訂正を求めるのも馬鹿馬鹿しかった。

今回の被害者は若い女性。それもなかなかの美貌の持ち主だったらしく、どの新聞社も報道に熱が入っている。また、遺体が発見されたのがプリムローズ・ヒルと呼ばれる小高い丘のある付近なのだ。ここは高級住宅街にほど近い一方、過去に殺人事件や決闘沙汰の舞台となったこともある曰く付きの場所である。そのため、何かしら記事に繋がるネタはないかと、各紙とも情報収集に余念がないのだ。

と、

バチンッ！

再び隣室から音が響いた。しかも今回は、バリ、ババツ、バツンツと、音が連鎖している。コナンとマリーは無言で顔を見合わせたが、どちらも相手の顔に「関わりたくない」と書かれているのを確認し合うだけだった。

が、次の瞬間、

バン！

と、ひと際派手な爆発が室内の空気を震わせ、ベーカー街222Bを揺さぶった。コナンとマリーは思わず座っていた椅子にしがみついた。

「ちよつと!? これ不味いんじゃないの、コナン!」

「ええいクソツ、あの発明バカめ!」

爆発音が連鎖する中、コナンは立ち上がって、隣室に繋がるドアに向かう。

しかし、コナンがドアノブに手を伸ばすより早く、ドアの方が待つてましたとばかりに隣室側から開けられた。

現れたのは見るからに「怪しい」青年だった。

黒いガラスを詰め込んだ丸眼鏡を掛け、幾つものポケット——その多くはパンパンに膨らみ、あるいは、中身がはみ出している——が付いたエプロンを付け、両手に革製のグローブをはめている。右手に謎の金属棒、左手には金属棒とコードで繋がった謎の金属箱を抱えていた。

黒眼鏡の遮光グラスに覆われているので、目は見えない。

だが、その口元はニンマリと会心の笑みを浮かべている。



「出来たぞ！ 新作の完成だ！」

雄々しく宣言し、謎の青年はずかずかとりビンダに押し入った。

テーブルに近付くと、手にしていた金属棒と箱をドカッと置く。マリーが慌てて自身のキャスケット帽を回収したが、そちらには目もくれない。

おもむろに黒眼鏡をむしり取り、

「今回は会心作だぞ？ さあ、見るがいい！」

青年——コナンの同居人、アーサー・ホームズは、カブトムシを捕まえたガキ大将よろしく、目を輝かせて得意げに言い放った。

「……まあ、そこに置かれれば、嫌でも目に入るが……」

とコナンは自らの言葉通り、嫌そうに顔をしかめる。

「今度はなんだ？ さっきの爆発音からして、いつもより危険度高そうだが」

「危険？ とんでもない！ 操作さえ正確なら、完璧にコントロールできる。安全そのものさ。逆説的になるが、完璧にコントロールできる安全性の高さこそ、武器に求められる一番の要素だからな」

「武器？」

もう嫌な予感しかしない。視界の隅に、マリーが無言のままテーブルから距離を取るのが映った。

「いいか？ これは言わば、電気的剑だ。こつちの箱が電源で、この剣身が電極になっている。高電圧を発生させ、電極に触れた相手に痛烈な電気ショックを与えることができるのだ！」

「『できるのだ』じゃない。なんでそんな『危険』な物を作った？」

「さしずめ、エレクトリック・ソードと言ったところかな。略して《Eソード》と命名しよう。とはいえ、これはまだ試作品。次は電源を小型化して一体化——」

「質問に答えろ！」

コナンが怒鳴ると、アーサーは、えー、とつまらなさそうに眉根を寄せる。

「僕の発明に理由などない。発明とは発想であり、発想とは飽くなき知識欲の果てに訪れる天啓だ。天啓に理由を求めるなんて、ナンセンスだよ、コナン」

「つまり思い付きで作ったということだな」

「それに、繰り返すが危険じゃないぞ？ 刃物なんかより、ずっと死ににくい」

「『死ににくい』？ 実に頼もしい言葉だ……って、待て、アーサー！ なぜそいつをこっちに向ける!? いま押したスイッチはなんだ？ 何か凄い音がしてるぞ!？」

「説明するより試した方が早いだろ？」

「だったら自分で試せ！ って、火花！ バチバチ火花が飛んでるじゃないかつ。そのどことが安全だ!？」

「大丈夫だ。電圧は十分低くして……おかしいな？」

「おい!？」

「待って、アーサー君！　いまカメラの準備をするから――」  
「マリーも、こんなときに記者根性を出さなくていい!？」

丸いテーブルを挟んで、右に左に牽制し合うコナンとアーサー。そして、マリーがブリタニア製の最新折り畳みカメラを取り出し、構えたときだった。

ドアがノックされた。

「アーサーさん？　あなたにお客様よ？　なんでも、《ジャック・ザ・ナイトメア》に関わることで相談したいことがあるんですって」

ドア越しの声が告げる。

三人は互いの顔を見合わせた。

（続く）